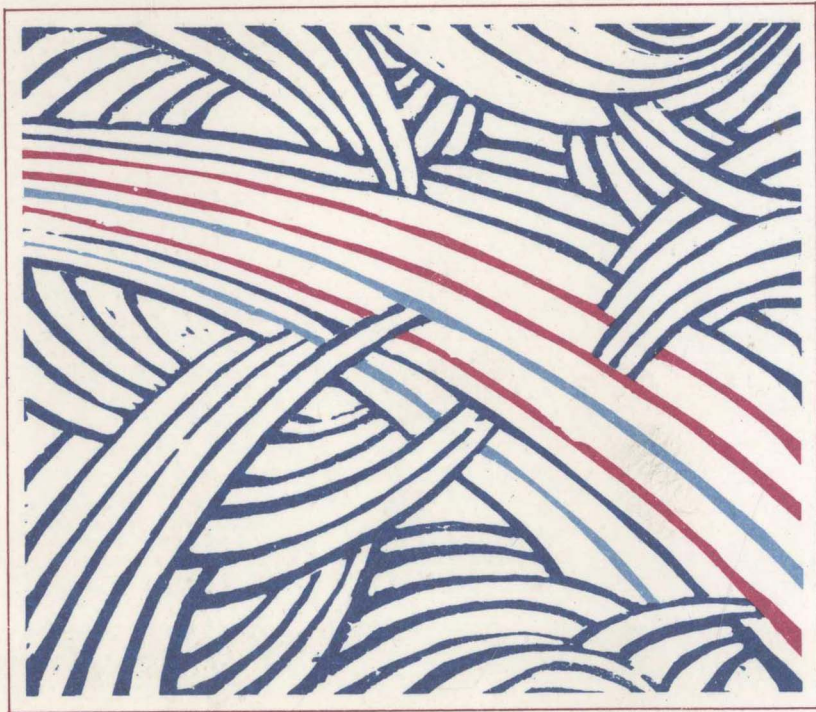


物語女流文壇史上

巖谷大四



中央公論社

巖谷大四

物語女流文壇史
上

物語女流文壇史 上

昭和五十二年五月二十日印刷
昭和五十二年五月三十日發行

著者 巖谷大四

發行者 高梨茂

印刷 三晃印刷

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九七七 検印廃止

物語女流文壇史 上

目次

樋口一葉と「萩の舎」

- 1 歌塾「萩の舎」の創設
- 2 最初の小説「藪の鶯」
- 3 樋口一葉の入門
- 4 半井桃水を訪う
- 5 下谷龍泉寺町から本郷へ
- 6 薄命の作家たち（木村曙、田沢稲舟、北田薄水、中島湘烟）

7

『女学雑誌』の周辺

- 1 若松賤子と「小公子」
- 2 清水紫琴と女權拡張
- 3 紫琴と福田英子
- 4 自由民権運動の濤
- 5 英子の晩年
- 6 相馬黒光

29

竹柏会と『明星』

- 1 漱石を失恋させた女（大塚楠緒子）
- 2 翻訳文学の三才媛（小金井君子、片山広子、瀬沼夏葉）
- 3 最後の文学夫人（森しげ）
- 4 堺の名花（与謝野晶子）
- 5 鉄幹をめぐって
- 6 茅野雅子と蕭々
- 7 石上露子の作歌と生涯
- 8 管野スガの遍歴

47

『青鞥』の時代と「新しい女」

- 1 『青鞥』の創刊
- 2 平塚らいてうの学生時代
- 3 心中未遂事件と同人たち
- 4 「新しい女」と「五色の酒」
- 5 その後のらいてう
- 6 早熟な才女（岡本かの子）
- 7 岡本

79

一平との結婚 8 原阿佐緒の数奇な一生 9 長谷川時雨
と『女人芸術』 10 田村俊子の奔放な放浪の人生 11 炎
のような女・伊藤野枝

『女子文壇』の人びと 130

1 今井邦子と水野仙子 2 二人の結婚と文学生活 3 「偽
れる未亡人」(三宅やす子) 4 短歌に生きる(三ヶ島霞
子) 5 「松葉杖」の作家(素木しづ子)

華やかな歌人と多彩な俳壇 164

1 「秋の夜」の憂愁(九条武子) 2 筑紫の女王(柳原白
蓮) 3 西の久女(杉田久女) 4 東のかな女(長谷川か
な女) 5 誓子と橋本多佳子 6 中村汀女と『風花』
7 星野立子と『玉藻』(付・三橋鶯女)

大正から昭和へ 219

1 漱石山房最後の作家(野上弥生子) 2 永遠の童女(吉
屋信子) 3 昭和一代女(武林文字) 4 夢二と秋声と順
子(山田順子) 5 「第七官界彷徨」(尾崎翠)

装釘 巖谷純介

物語女流文壇史
上

樋口一葉と「萩の舎」

1 歌塾「萩の舎」の創設

明治の女流文壇は歌道によって口火が切られた。遠く平安朝の代、文学の祖とも言うべき紫式部、清少納言らを生みながら、その後女流作家は影をひそめ、長い年月がたった。ようやく江戸末期から明治にかけて、税所敦子（一八二五～一九〇〇）、松の門三艸子（一八三二～一九一四）、中島歌子（一八四一～一九〇三）、下田歌子（一八五四～一九三六）、竹屋雅子（一八六六～一九一七）ら歌人が続出して、新しい女流文壇の先がけとなった。

明治十年の秋、小石川安藤坂（水道町十四番地）に「萩の舎」という歌塾が女性によって初めて開かれた。中島歌子の創設である。

中島歌子は、天保十二年江戸日本橋北鞆町に生れたという説と、弘化元年十二月十四日、父の郷里入間郡森戸村に生れたという説とがある。父は中島又左衛門（又右衛門という説もある）、母い

く子は綱谷姓。歌子はその次女で、幼名とせ、兄妹があつたらしいが不詳である。又左衛門は、小石川伝通院前、水戸藩の御用宿「池田屋」の養子となつた。

歌子は安政五年、十八歳（弘化元年生とすれば文久元年）の時、水戸藩の林忠左衛門と結婚したと言われるが、林姓を名乗つた形跡がないので正式の結婚ではないという説もある。

忠左衛門は、いわゆる水戸っぼの過激派で、新婚の席のあたたまるとまもなく、国事に東奔西走し、水戸天狗党に属していたが、万延元年二月、水戸紺屋町魂消橋の戦いで負傷した。彼は脱藩組ではなかつたためか、三月三日の桜田門外の変には加わらなかつた。当時江戸にいた歌子は、夫が事変に加わつたものと思ひ、事変直後、赤合羽に鰻頭笠のしもべ姿に身をやつして夫を探しに出掛けたりした。七月、忠左衛門は同志三十七名と共に芝薩摩屋敷に保護され、間もなく駒込の水戸藩邸に引き渡された。

元治元年六月、忠左衛門は武田耕雲斎と呼応して筑波山の戦いに再び出陣したが、部田野村で幕府軍の撃つた百目砲に当り重傷を負つた。中島家の記録ではここで戦死したことになっているが、一説によれば、全軍と共に降服し、久留米藩（黒田家）に預けられ、慶応元年正月に幽死したという。享年二十六歳であつた。

歌子は夫の妹でつ女と共に、一時逆賊の罪で獄につながれたが、出獄後、江戸の生家に帰り、母いく子と小石川水道町十四番地に住み、村田春海の流れをくむ加藤千浪の門に入って歌道に専念した。

しかし千浪は明治十年十月に没したので、その後は千浪の兄弟子で御歌所に仕える伊東祐命と

親しく交わり、その尽力で「萩の舎」を開くことが出来たのである。

2 最初の小説「藪の鶯」

その「萩の舎」が開かれて間もなく、田辺龍子という十歳の可憐な少女が入塾して来た。

田辺龍子（一八六八～一九四三）は明治元年十二月二十三日、東京本所番場の田辺別邸に生れた。父太一、母己巳子の長女である。

田辺家は代々与力で、太一の父新次郎は石庵と号する漢学者で、太一も蓮舟と号して漢詩文をよくした。龍子の生れた時は、丁度明治に改元された時で、旧幕臣である父太一は、江戸城警備の目付役を退いて隠棲していたが、間もなく新政府に認められ、外務書記官から大書記官、元老院議員、錦鶏の間祇候と栄達した。

そういう上流家庭に生れ育った龍子は、八歳で麴町小学校に入り、二、三ヶ月後に跡見花隠の塾に入って書道を修めた。後に花園と名乗ったのは花隠に因んだものである。またこの頃から、父と知合いの伊東祐命に国学と和歌を学び、その縁で「萩の舎」に入ったのである。

その頃、

野中にもし夕立の雨にあつたら

道ゆく人はさぞこまるらん

という、幼稚な歌を詠んでいる。

明治十三年、未発表ではあるが、跡見時代の友達をモデルにした「五人女」という短篇を書い

た。

太一は派手好きで豪放磊落な性格で、明治九年、麴町に邸宅を構えると、自邸に九代目団十郎、五代目菊五郎、三遊亭円朝ら一流の俳優や芸能人を出入りさせたり、花柳の巷に居続けたりして、「番町の御前」と呼ばれたほどの遊び人で、金を湯水のごとくに費った。

「父上は花柳社会から御前様といはれ時めき派手に暮して居られたが、外面のいろいろの困難は世の中と共に安静になつても、母上の心の中の波風は、いよいよ荒くなつた。(中略)幼い私の家の状は、芸人とか芸者とかいふものが、一番出入をしげくしてゐたやうに思ふ」(その日その日)と、思い出にも書いているが、そんな有様だったから田辺家の内情は火の車であった。

明治十五年、女子学院の前身である桜井女学校に入ったが間もなく退学、十九年に明治女学校に入って英語を学ぶかたわら書道を教えていたが、これも間もなく退学して、お茶ノ水の前身東京高等女学校専修科に入った。

その翌年二十年に三井物産ロンドン支店長をしていた兄次郎一が客死した。この年の春、彼女も病気で学校をしばらく休んだ。その時、書生の才八という文学好きの男が、彼女の病床の慰みに、当時流行していた春の屋主人(坪内逍遙)の小説「当世書生気質」を持って来た。彼女はそれを読んで、「これなら私にも書ける」と思った。そうして筆をとったのが、処女作「藪の鶯」である。

それは明治二十一年六月、春の屋主人の校閲を得て、福地源一郎(桜痴居士)の序文と中島歌子の跋文がつけられ、金港堂から刊行された。この時はじめて、「花圃女史」と号した。

それを書く動機について、彼女は別に、母と書生の才八が、兄の一周忌についての費用のこと
でひそひそ話をしているのを聞いて、その費用のたしにするために書いたとも述懐している。

その稿料は三十三円二十銭であった（因みに当時幸田露伴の「露団々」に対して金港堂は百円支払っ
ている）。しかし、月給二十円で充分に生活出来る時代だったから、それはかなりの大金であつ
た。それで兄の供養を済ますことが出来た。作品に因んで、鶯の模様の染浴衣を引出物に配り、
円朝らも呼んで嘶をさせたと言うから、相当派手な法事が出来たのである。

ところで「藪の鶯」の書き出しは次の通りである。

「男『アハ、ハ、ハ。此ツ、レデースは。パアトナア計ばかりお好で僕なんぞとをどつては。夜会に来
たやうなお心持が遊ばさぬといふのだから。』」

甲女『うそ。うそ計ばかり。さうぢやムじやり升まんげれども。あなたとをどるとやたらにお引張ひっぱり回し遊ば
すものですか……あの目がまはるやうでムまりますんで。其おことわりを申上たのですワ。』

男『まだワルツがきまりませんなら願ひませうか。』
ときれいにかざりたるプログラムを出して名を書付る。

男『では今に』と此男は踏舞の方へゆく。つづいてあまたの貴嬢達は皆其方に行たりしあとに
残れる前のふたりのむすめ。

甲女『あなた今のお方御ぞんじ。』

乙女『エーあの方は斎藤さんとおつしやつて、宅へもいらつしやりました。』

甲女『オヤさやうでムまりましたか。わたくしは此間おけいこの時お名をはじめてしり升またのよ。

もとからよくおみかけ申方まうかたでしたが。なんですか少し軽率なお方ねへ。さうしてお笑声などが馬鹿に大きく御座りまして変な方まじなですわねへ。』

乙『デモあの方は学問もおあり遊ばして。中々磊落なよい方でござりますヨ。』
と互にかたらふこの二嬢は、数多あまた群集したる貴嬢中にて水きはのちたる人物……』

当時としては、思い切ったユニークな発端である。そしてこれは当時評判の鹿鳴館の新年の舞踏会の場面である。

明治二十三年の国会開設を目前にして、かつての中江兆民、板垣退助らの自由民権運動が急激に圧迫され終息させられはじめていた頃である。明治初年の極端な欧化主義への反動が起りはじめた頃である。そして男女同権の思潮がそろそろ芽をふきはじめた時である。そうした明治二十年代の雰囲気ふんいきが、なかなかよく出ている作品である。そしてこれは女流作家の近代小説としては最初の作品である。

明治二十五年、彼女は三宅雪嶺と結婚した。

3 樋口一葉の入門

一葉・樋口夏子が「萩の舎」に弟子入りしたのは、明治十九年八月二十日である。

樋口夏子（一八七二〜九六）は、明治五年五月二日（陰曆三月二十五日）東京府第二大区一小区（現在の千代田区）内幸町一丁目一番屋敷にあった東京府庁構内官舎に生れた。父為之助は東京府少属であった。夏子が生れて間もない五月十七日に則義と改名した。山梨県大藤村（現在の塩山

市中萩原)の農家の出身だが、明治新政府にかわる直前、八丁堀同心浅井氏の株を買って直参となったのである。それから東京府少属(官等は十二等判任官)という下級官吏になり、さらに土地家屋の売買や金融業なども手広くやったが、荷車請負業組合という新事業に関係して失敗し、債権者たちにせめられながら明治二十二年七月十二日に病死した。夏子が十八歳の時である。母はたきと言つて、則義と同郷の人である。

夏子が生れた時、姉ふじ、長兄泉太郎、次兄虎之助がいた。明治七年に妹邦子が生れた。

夏子は幼い時から本を読むことが好きで、七歳の時、馬琴の「八犬伝」を三日で読み上げたという。

則義は夏子を利発な娘と思ひ溺愛し、古歌なども教え、本を読むことをむしろ勧めたが、母のときは長男の泉太郎を可愛がり、夏子が女のくせに本ばかり読んでゐるのを喜ばなかつた。その母の眼を逃れて、土蔵にかくれ、窓から射す薄明りをたよりに、草双紙類を読みふけた。そのためひどい近眼になり、眼鏡をかけて本を読んだ。

その頃樋口家は本郷六丁目に住んでいたので、夏子は、はじめ公立の本郷小学校に入ったが、すぐ退学して私立吉川学校に入った。しかし、明治十四年秋、下谷御徒町に居を移したので、私立青海学校に再び転校した。

明治十六年十二月、夏子は、青海学校小学高等科第四級を首席で卒業した。しかし第三級には進まずに退学した。母たきが、女の子に学問をさせることを好まず、それよりも家事の見習いなどさせた方が後々のためと考えたからである。

父則義は、頭のいい夏子にもっと学問をさせたいと思い、たきと争ったが、結局たきの意見に負けた。その頃長男の泉太郎が胸を患い、次男の虎之助が不良仲間に入り、小遣いをせびるばかりでなく家のものを持ち出して質入れしたりする有様で、経済的に苦しかったのである。虎之助はやがて美濃出身の陶工成瀬誠至のところへ徒弟奉公に出された。

青海学校を中退した夏子は、翌十七年の一月から二、三カ月、和田重雄に和歌の指導を受けた。和田は元芝大神宮の祠掌で、則義が社寺掛をしていた頃からの知り合いであった。

夏子は台所の手伝いや拭き掃除など家事を嫌って、そういうことは妹の邦子にまかせた。従順で明るい性格の邦子は、嫌がらずによく働いた。たきは幾分小生意気な夏子よりも、よく働く女らしい邦子の方を可愛がった。

たきは、神田同朋町の松永政愛の妻のところへ、夏子を裁縫を習いに通わせた。その松永の家で夏子は、十四歳の時はじめて東京専門学校二年の渋谷三郎に会った。

渋谷三郎は、夏子の父母が安政四年に江戸へ出て来た時世話になった郷党の先輩真下専之丞の妾腹の孫であった。

明治十四年、石坂昌孝（その娘美那は北村透谷と恋愛結婚している）を最高指導者とする政治結社融貫社というのが出来た。自由民権運動の結社である。その事務所が三郎の父渋谷徳次郎の家になっていた。

三郎も後に融貫社の幹部になった。明治十七年、困民党騒擾のさなかの八月十六日、八王子の自由党本部広徳館で多摩自由党の緊急集会が開かれたが、その時召集された十人の幹部の中に選